

日本YMCA同盟

THE  
YMCA

The Young Men's Christian Association News



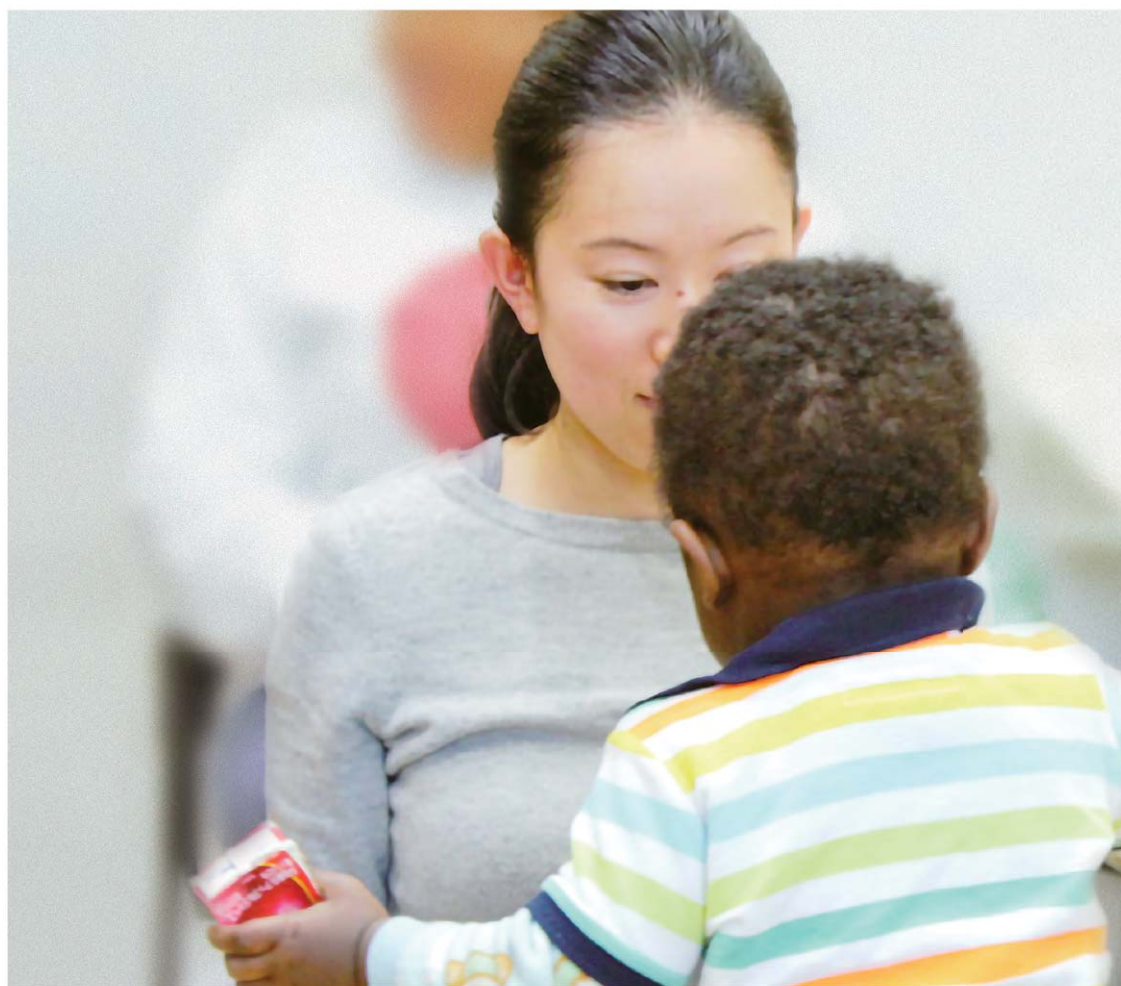
No.787 2019

2019年6月1日発行（毎月1日発行）  
1947年10月27日 第三種郵便物認可  
本体価格45円（外税）（送料62円）  
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟  
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号  
TEL：03-5367-6640 FAX：03-5367-6641  
URL：http://www.ymcajapan.org/  
発行人／神崎 清一 編集人／山根 一毅  
印刷／あかつき印刷株式会社



# 共に生きよう

— さまざまな文化を背景とする子どもたちのそばで —



## OPINION

### 日本で暮らす私たちこそできる難民支援

鶴木 由美子(認定NPO法人難民支援協会(JAR))

「難民」というと、自分には関係ない、どこか遠い所の出来事とを感じる人も多いかもしれません。難民は紛争や人権侵害などから自分の命を守るためにやむを得ず母国を追われ、逃げることを余儀なくされた人たちのことですが、現在、世界では日本の人口の約半数である約7,000万人が故郷を追われているため、今や日本も含めた世界全体に関わるグローバルな問題です。日本にもアジア、中東、アフリカなど世界各国から多くの難民が逃れてきており、国際社会の一員としての日本の対応力が問われています。

しかし、2018年は10,493人が難民申請を行い、認定されたのは42人でした。日本では国際基準と比較しても「難民」の認定基準が不透明であり、制度や政策も不十分です。その結果、難民が直面するさまざまな問題に対し、日本社会はきちんと向き合っているとは言えない状況です。女性や子どもを含め、最低限の医・食・住がままならない人、ホームレス状態になってしまう人も多くいます。

そもそも難民申請をしても、結果が出るまでに数カ月から数年もの時間がかかり、難民認定に至っては10年以上かかることもあります。この間に在留資格が切れてしまい、滞在超過（不法滞在）として収容され、家族が引き離されて、親と自由に会うこともできない子どもたちもいます。今年は、家族が収容されてしまった子どもたちが笑顔を取り戻せる時間を作りたいと思い、YMCAが主催する地域の子どものためのプログラムに参加させていただきました。子どもからは「楽しかった！また行きたい！」との声があり、今後もこのような協働の可能性を広げられたら大変うれしく思います。

世界には今、7,000万もの故郷を追われる人がいます。難民となる前は、それぞれ大切な人たちの生活や、子どもらしい日常がありました。家族で安心して暮らしたい、その思いでやっとたどり着いた日本で待ち受けていた窮状に「こんなはずじゃなかった」「家族に会いたい」と涙を流す難民を前にして、心が張り裂けそうになることもあります。

これからも難民が新たな土地で安心して家族で暮らせること、そして難民と共に生きられる社会が実現することを目指し、JARは難民への支援活動、日本社会への認知啓発、政策提言の活動を諦めることなく続けていきます。

(OPINION…意味は「意見・見解」など。『THE YMCA』では毎号、関係ある団体・個人からの意見や提案を掲載します。)

オリーブ保育園は、国立大学やさまざまな研究機関があるつくば市にあり、いろいろな国にルーツを持つ子どもたちが在園しています。

その中で職員と保護者の方々の間に立ちほだかるのは、言葉の壁。細かな説明やお手紙のやり取りはお互いに苦勞が絶えず、英語と身振り手振りを活用しながらのコミュニケーションに多くの時間を必要としました。徐々に、保護者の方はこちらが伝えようとする思いを感じてくださり、人柄や子育ての文化についても相互理解が深まりました。最初は大変さを感じていた職員も、今ではさまざまなコミュニケーションの手段を積極的に考えるようになりました。



チュニジアや中国のお友達といっしょに

一方、子どもたちは言葉の壁を壁と感じず、すぐに飛び越えていきました。「いっしょにあそぼう！」と自然な感じで遊びはじめる子どもたち。1年在園している他の子どもたちも普通に「Yes! OK!」と言い、逆に外国籍の子どもが「いいよ」というような光景も見られます。子どもたちには、言葉の壁や肌の色などは関係ないのでしょうか。いろいろな子どもたちがいること、そして「みんなおんなじおともだち」なのだということを子どもたちから教えられました。

これからも多くの外国籍の子どもたちがYMCAのドアを叩いてくるでしょう。慣れない異国での生活を一番不安に感じているのは、誰よりも彼らです。小さな手を握る私たちがその思いを忘れずに、子どもたちやご家族と手を取り合い、安心できる居場所として共に歩んでいきたいと願っています。

横浜YMCAの専門学校では、2016年から始まった「外国につながる保育士をめざす若者を支える奨学金制度」(2018年で募集終了)を利用した、8人の学生が保育士をめざして学んでいます。8人はそれぞれ外国にルーツを持ち、神奈川県内の高等学校を卒業しました。今、神奈川県内の高等学校に在籍する「日本語指導を必要とする生徒」の数は全国最多(552人)で、その数は年々増加しています。



日本の絵本の読み聞かせ

学生たちの多くは、子どものころに日本語がまったく分からず頭が混乱したり、お正月などの日本文化を知らずに見下されたり、見た目が日本人と違うからと差別や偏見にさらされる経験をしています。また、家族や親戚が病院や役所などへ行く時には、通訳として付き添うために学校を休むこともあります。そのような毎日の中で「子どもが好き」「保育士になりたい」という夢をかなえるために、授業はもちろん日本語の補習も一生懸命に取り組んでいます。

一方で、定住化が進み、保育園に在籍する外国籍、あるいは日本国籍だけど日本語が話せない、といった外国にルーツのある子どもたちもますます増えています。生活習慣や価値観の違いを自ら経験している学生たちは、このような外国にルーツを持つ園児と保護者の気持ちを十分に理解できます。そして、日本人の園児や保護者に対しては、異なる文化や価値観に触れながら理解を深める大切さを伝えることができます。

二つの言語・文化の中で育った学生たちが、保育士として地域や社会において多文化共生の担い手として、活躍していくことが横浜YMCAの専門学校の願いです。

## Positive Net NEWS

ポジティブネット…互いを認め合い、高め合うことのできる、人の善意や前向きな気持ちによってつながるネットワーク

### 世界と出会おう! 山梨YMCA「Global 3 Days」

春休みプログラム「わいわい地球塾」の中で、世界の国々と五感を使って出会う特別企画「Global 3 Days」を開催しました。

1日目は、元青年海外協力隊によるキルギス共和国についてのお話会です。キルギスの料理や音楽、民族衣装の試着、そしてキルギス数字のビンゴ大会で大変盛り上がりしました。2日目は富士山YMCAグローバル・エコ・ヴィレッジで、中国、タイ、インドネシアからの留学生と一緒に各国の料理と各国語の看板を作り、屋台ごっこをしました。歌や手遊び、ゲームなどで富士山もびっくりの子どもたちの笑い声が響きました。最終日は「世界がもし100人の村だったら」のワークショップで世界の状況を体験的に学び、午後は



タイの手遊び「卵が割れた!」が大人気

難民支援のボランティア活動をする山梨英和大学の学生さんによる「難民」をテーマにしたお話会でした。その中で語られたパキスタン人のゲストによるメッセージが、子どもたちの心に静かに響いてくれたことを祈ります。

今回の企画のベースにあるのはSDGs(持続可能な開発目標)です。人と出会い、同じ食べ物を食べ、笑い声を響き合わせながら、子どもたちは「どんな世界を作りたいか」という問いを、おなかと心と皮膚感覚で受け止め、自分の言葉で表してくれました。それはSDGsを実現する上で最も大切な一歩だと感じました。ポジティブネットの地域の拠点として、山梨YMCAの歩みを強められた3日間となりました。

山梨YMCA 福田 奈里子

### 全国YMCAインターナショナル・チャリティーラン 開催記念壮行会



パワーフードを囲んで

YMCAインターナショナル・チャリティーランはYMCAを代表する大きなイベントのひとつです。2019年度からは各国大使館の支援も得て、よりインターナショナルな運営を目指しています。

4月26日には駐日カメルーン共和国大使館特命全権大使ピエール・ゼンゲ閣下、アルフォンシーヌ夫人の全面的なご理解とご協力により、カメルーン大使公邸にて、開催記念壮行会「がんばれ! YMCA インターナショナル・チャリティーラン - スポーツ大国、カメルーン大使夫妻がもてなすパワーディナー -」を実施しました。壮行会には、大会実行委員長の有森裕子さんも駆けつけてくださり、励ましのメッセージをいただきました。

「パワーディナー」の名のとおり、アルフォンシーヌ夫人による、スポーツ大国カメルーンの「体にパワーが付く食事」がふるまわれました。中でも、ほうれん草に似た、苦味のあるキク科の植物を何度も洗って苦味を調整し、ピーナッツソース、魚、肉などと煮込んだ「ンドレ」は参加者の話題の的となっていました。

今年も全国21カ所で、地域ごとに特色のあるインターナショナル・チャリティーランが行われます。それぞれの成功を祈り、「スポーツ大国」カメルーンのディナーを楽しみながら、全国の開催地へ、そしてランナーへとパワーを送る夜となりました。

日本YMCA同盟 編集部